

◎京都府の地域実態に即したこころの健診支援事業

住民がん検診で「こころの健診」を実施しました。

平成25年度より、亀岡市在住の40歳の住民を対象としたがん検診で「こころの健診」を実施しており、本学学生が問診員として活躍しています。「こころの健診」は、心の健康に関するスクリーニングを行うものであり、困難を抱える人を早期発見・介入するとともに、うつ病等に関する啓発を行う地域保健活動です。平成26年度は、卒業生1名、大学院生12名、学部生9名の計22名が参加しました。また、京都府から地域協働研究教育センターに事業委託金をいただき、大学院2回生をスタッフとして起用し、企画運営や新規問診員のサポート等を行うとともに、京丹後市での「こころの健診」実施のため、問診員の派遣を行いました。住民のみなさんは学生と知ったうえで心の内を吐露していただき、場を活用していただきました。また、学生たちは臨床の現場を心待ちにしており、乾いたスポンジのように多くを吸収しました。亀岡市、京丹後市、京都府のみなさまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。



◎宇治茶に関する古文書調査及び文化講座カリキュラム作成・開催業務



宇治茶の魅力を広く市民の方々へ伝えるために。

宇治茶世界文化遺産登録推進戦略である「宇治茶の価値を未来へ伝承する地の拠点づくり」の一環として、基礎資料となる「堀家文書調査」と「宇治茶文化講座」を開催しました。「宇治茶の多様性」による魅力を伝える講義と体験を実施。茶生産者、茶商、研究者など多様な講師陣が、煎茶、玉露、碾茶(抹茶)の歴史・文化、生産・流通に関わる知識・想い・工夫を伝えてくださいました。定員の2倍の参加者で会場が埋められ、極上の宇治茶を味わう体験の時間には、笑顔と歓声があふれました。来年度以降の継続を望む声が多数寄せられ、地域文化の継承の重要性を再認識しました。

イベント開催のお知らせ

京都文教大学 地域志向教育研究・協働研究
平成26年度成果報告会・平成27年度公募説明会

●日時：平成27年3月5日(木) 10:00～12:00
●場所：京都文教大学 普照館3階 F305教室

平成26年4月に開設された地域協働研究教育センターの「地域志向協働研究」大学COC事業の「地域志向教育研究 ともいき研究助成<住民参画型・産官学協働型>」の合同成果報告会ならびに平成27年度の公募説明会を実施いたします。

当日は共同研究の代表者に報告を行っていただき、地域のみなさまや関係者の方々に研究の成果を還元いたします。研究テーマの一覧は下記の通りです。報告会・説明会の申込みは不要、参加無料です。みなさま方のご来校をお待ちしています。

大学COC事業
「地域志向教育研究 ともいき研究助成<住民参画型・産官学協働型>」

分野	テーマ	
住民参画型	こころの健康	東洋的身体技法を用いた地域住民のセルフケア実践及びセルフケア指導者教育
	学習支援	まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造—地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援—
産官学協働型	商店街	宇治3商店街の抱える課題の明確化と活性化に向けた方策の検討
産官学協働型	障がい者支援	京都府南部地域における障がい者の就労支援に関わる研究
	産業	宇治市の魅力発信事業に関する課題抽出のための研究
	地域デザイン	地域コミュニティ活性化推進のための制度改革にむけた課題と方策の検討

地域協働研究教育センター「地域志向協働研究」

分野	テーマ
観光	宇治・伏見地域の観光資源開発と地域振興
多文化共生	京都南部・向島地域のニュータウンにおける大学・住民協働のまちづくり研究
小中高連携	官学連携による「宇治学」副読本作成と現場での活用に関する研究
子育て	子どもたちを豊かに育むまちづくりのための「こらぶれーしょん」プロジェクト
障がい者支援	対人援助のモラルの向上を目指した多職種相互乗り入れ型の研修プログラムの開発に関わる研究

京都文教大学 地域協働研究教育センター
ニュースレター「ともいき」vol.1 (2015年2月発行)

発行：京都文教大学地域協働研究教育センター

【お問合せ】 京都文教大学フィールドリサーチオフィス

〒611-0041 京都府宇治市横島町千足80 TEL:0774-25-2630 FAX:0774-25-2822

E-mail: fro@po.kbu.ac.jp URL: http://www.kbu.ac.jp/kbu/ 京都文教大学

京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニュースレター ともいき vol.1
2015年2月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に採択

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に、本学が申請した「京都府南部地域ともいき(共生)キャンパス」で育てる地域人材が採択されました(申請数237件 採択25件)。本事業では、連携自治体の宇治市、京都市伏見区と共に、本学の建学の理念である「共生」の精神を具現化し、大学のリソースを地域発展に、また地域のパワーを大学教育に活用し、大学と地域が共に生かしあい、共に生き生きする「ともいき(共生)キャンパス」の創造を目指します。

地域協働研究教育センター長 ごあいさつ

センター長 森 正美

本センターは、京都文教大学がこれまで取組んできた「地域で学び、地域で育てる」教育と、「宇治、そして京都に京都文教があつてよかった」と地域から愛され信頼される大学を目指す地域連携活動の、より一層の推進と質の向上を、全学一体となって進めるために設立されました。

臨床心理学部、総合社会学部という、小規模大学ながらユニークで総合性を有した特色ある学問領域を生かし、これまで通り地道で継続的な手法を大切にするとともに、ますます複雑化する社会課題に応えることのできる質の高い「研究」「教育」「社会貢献」を実現する多彩な事業を展開する所存です。

本センターの名称に用いている「協働」には、地域との「連携」という連絡・協力関係からさらに踏み込む強い意志と願いを込めています。住民、行政、企業、各種団体、大学など、多世代・多国籍・多様な立場や考えの人々が集い、知恵を合わせる。それぞれの長所を結びつけ、短所を補い合うことで、待ったなしの地域課題や将来の地域社会を担う人材を育成するミッションに取り組み、共に暮らせる地域・社会を創造する「共生(ともいき)キャンパス」の結節点となるセンター活動を目指してまいります。

一人ひとりでは微力でも、協働することで実現可能なことも増えるはず。どうぞお気軽に各種共同研究、講座、事業に参加していただき、チームの一員として力を合わせて「ともいき(共生)の地(知)の拠点づくり」を実現していきましょう。

地域志向のカリキュラムを整備

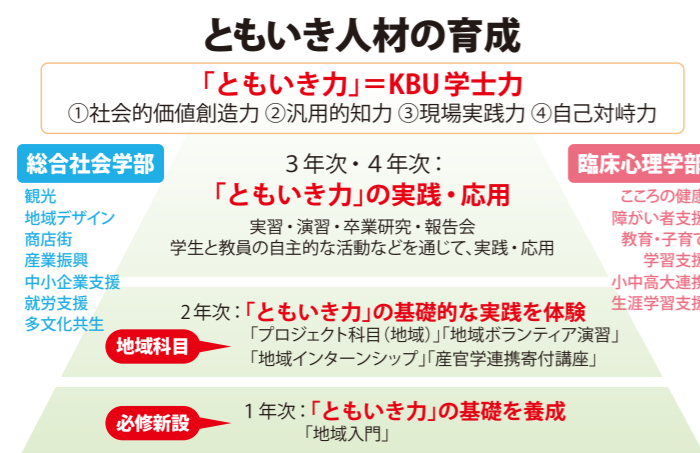
地域で学び、地域に学ぶ。そして、地域に活かす。——ともいき人材の育成

京都文教大学の学士力(KBU学士力)として、地域の人々と「共に生かしあう力=ともいき力」を設定し、地域志向教育と専門教育を軸に、京都府南部所在の本学で学んだ意義を生かすことのできる教育カリキュラムと環境を提供します。

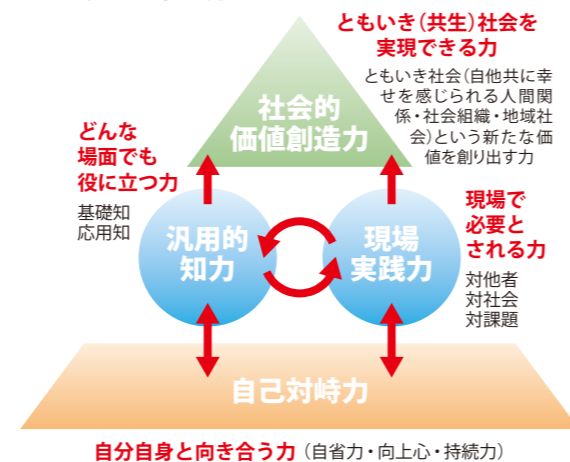
これまででも、本学では学生の地域学習活動を通じて地域活性化に取り組んできました。その取組をさらに強化、深化するため、平成27年度より、1年次から『地域入門』(新設必修)を全学的に開講し、地域志向学習の動機付けを明確にします。そして、

2年次での『プロジェクト科目』や『ボランティア演習』など現場実践教育科目や、3、4年次以降の各学部の専門教育に有機的に接続し、地域の人々と「共に生かしあう力=ともいき力=京都文教学士力」を備えた学生を育成します。さらに、学生の「主体的な学び」の促進と、各学部の現場主義教育や臨床教育の必要に応じ、主体的な学びの場として「地域」という学習環境を活用しやすいように、カリキュラムの体系化とサポートを行います。

◆ともいき人材の育成



◆KBU学士力



2014年度は「観光」「地域」をキーワードにインターンシップを実施。2015年度からは新科目となって、さらにパワーアップします。

◆観光・地域デザインコース インターンシップの流れ



研修中の様子(宇治市役所)



成果発表会



ご協力いただいた研修先のみなさんと一緒に

2014年度の地域インターンシップを振り返って

「地域インターンシップ」は、大学と地域が連携する環境の中で、学生が「協働する力(ともいき力)」を獲得するためのプログラムとして、2015年度より設置される科目です(開講は2016年)。その前段階として、2014年度は、総合社会学部観光・地域デザインコースにおいて実習先を観光関係、並びに地域関係に絞ったインターンシップを行い、11名の学生が9つの研修先にお世話になりました。

プログラムでは、まず学生の希望と研修先のマッチングを行い、その後履歴書・志望理由書の作成、訪問時の面談練習、ご挨拶のためのアポ取りなどの事前研修を経て、主に8～9月に約1～2週間のインターンシップを行いました。研修中には担当教員による中間訪問も行いましたが、学生達の緊張しつつも充実した表情を嬉しく思うと共に、研修先のみな様の暖かいご協力を感じずにはいられませんでした。研修後の10月には、成果発表会を行いました。わずか数カ月前とは違う大きく成長した姿を見せてくれたことに、多くの教職員が驚きを隠せませんでした。また多くの研修先様がご出席いただいたことにも、改めて感謝いたしました。現在は研修の締めくくりとして報告書の作成を行っており、

近日中にまとめられる予定です。

プログラムを通じて、学生達には3つの変化が生まれたと感じています。1つ目は、行動に責任感が伴うようになったことです。今回は多くの職場で実践的な業務を任せていただいたおかげで、学生達が責任を持って仕事をする大切さを理解できたようでした。研修後の授業やゼミでの言動が、目に見えてしっかりしてきました。2つ目は、人の話を傾聴する姿勢が見えるようになったことです。仕事も生活も自分ひとりでやっているのでは無い、他者と協力して初めて成り立つのだと感じてくれたのではないかと思います。そして3つ目は、改めて自分の将来を真剣に考えるようになったことです。この研修をきっかけに、やはり自分はこれをしたい、そのためには今この努力をしなければならぬと、自分の将来を前向きに構想する学生が増えてきました。

これからも大学と地域との連携を強化し、学生に「協働する力(ともいき力)」を身につけてもらうために、「地域インターンシップ」の充実尽力していききたいと思います。

総合社会学部 准教授 片山 明久

京都文教学園 110 周年記念事業 京都文教大学地域協働研究教育センター開設記念講演会 「ソーシャルデザイン：地域課題を解決する創造的手法」

2014年12月6日(土)に実施しました。

地域のために、一人ひとりができることを考えよう

12月6日(土)に、社会課題をデザインで解決するソーシャルデザイン分野の第一人者である寛裕介さん(issue+design)をお迎えし、京都文教学園110周年記念事業 京都文教大学地域協働研究教育センター開設記念講演会「ソーシャルデザイン：地域課題を解決する創造的手法」を開催いたしました。

寛さんが代表を務める市民参加型ソーシャルデザインプロジェクト issue+design では、震災時の避難所運営を支える「できますゼッケン」、現代育児のさまざまな課題解決につながる「親子健康手帳」、住民役の地域観光のための「Community Travel Guide」、若者向けうつ・自殺予防ウェブサービス「ストレスマウンテン」など、多様な地域課題に対するプロジェクトを立ち上げ、取組まれています。

寛さんは、地域社会が抱える課題を提示された上で、ソーシャルデザインの基本的な考え方や地域課題に取り組むためのアイデア、他者と共に取組む「協働」のヒントなど、これまでのご自身の活動例を挙げて講演いただきました。

デザインは、複雑な地域の問題の本質を捉え、調和と秩序を取り戻すことに貢献できる、と寛さんは話されます。地域住民の心に訴え、行動を喚起し、行政に頼りきりになるのではなく、住民自身が行動を起こして、相互協力し、一致団結したムーブメントが生まれること。そんな自助・共助型地域生活への行動転換を促すための地域づくりのプロセスがソーシャルデザインであり、「公助型社会※」から「自助・共助型社会」の仕組みづくりをすることが、社会が抱える課題を解決するにあたって必要になると話されました。

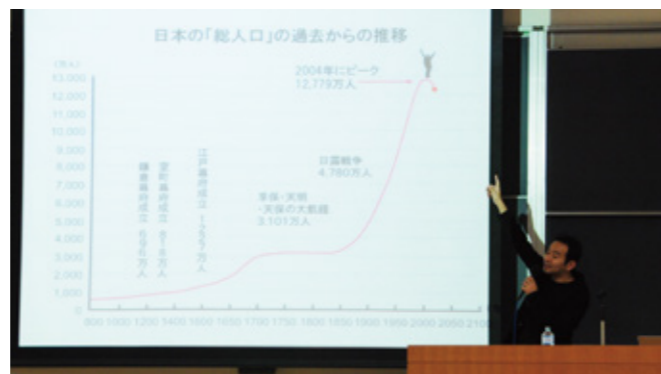
当日は100名以上の学生・教職員・地域のみなさんが参加し、会場は熱気に包まれました。質疑応答の時間では、たくさんの質問が出され、あっという間に講演会終了時刻に。公助型から自助・共助型の地域解決へ、そこに行政が支援し、住民は仲間をつくり、「自分ごと」として取組んでいくこと。協働して地域課題に取り組むことを学んだ1日となりました。

※寛さん曰く、「公助型社会」とは行政が住民に対し、「してはいけない、しなければいけない」というような禁止・義務を行うのに対して、「自助・共助型社会」とは住民が意欲を持って参加するような社会のこと。



講師：寛裕介氏 (issue+design 代表)

〈プロフィール〉
1975年生まれ。一橋大学社会学部卒業。東京工業大学大学院社会理工学研究科修了。東京大学大学院工学系研究科修了(工学博士)。2008年山崎亮他とソーシャルデザインプロジェクト issue+design を設立。以降、社会課題解決のためのデザイン領域の研究、実践に取り組む。グッドデザイン・フロンティアデザイン賞(2010)、キッズデザイン賞審査委員長特別賞(2011)、日本計画行政学会・学会奨励賞(2011)、竹尾デザイン賞(2011)他受賞



講師の寛裕介氏



講演会の様子

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」 採択記念講演会

2014年12月17日(水)に実施しました。

本学と地域の方々がともに取組む今後の活動に注目

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に、本学の『京都府南部地域ともいき(共生)キャンパスで育てる地域人材』が採択された記念と本学教職員の研修会も兼ねた講演会が12月17日(水)に開催されました。教職員、学生、地域住民など、約100名が参加しました。

平岡学長が開会の挨拶で、本事業名にもある「ともいき(共生)キャンパス」への思いを、建学の理念や今後の本学のあり方、方向性なども交えて、お話ししました。



京都文教大学学長 平岡聡

「ともいき(共生)」を通じた教育、研究、社会貢献をめざす



森正美 地域協働研究教育センター長

続いて、森正美地域協働研究教育センター長が本学のCOC事業の概要について説明しました。エリアとしての「地の拠点」、大学の研究・専門性と教育・人材育成として学生を育てる「知の拠点」、本学の建学の理念としての「共生(ともいき)」を通じた「きっかけづくり・場づくり・人づくり・仕組みづくり」など、今回の事業のもととなる考え方をわかりやすく伝えました。

併せて、具体的な教育・研究・社会貢献の取組内容について、現状報告も兼ねて説明しました。

松本大学の取組事例(平成25年度採択)に発見がいっぱい

最後に「松本大学が考える大学教育とCOC」をテーマに、松本大学の住吉廣行学長にご講演いただきました。

松本大学は昨年度に大学COC事業に採択され、長野・松本地区で先進的な取組をされています。大学の任務としての地域人材育成や現場から理論への教育手法をもとにした地域連携の実践例、地域社会と連携した教育を通じて、「実社会の問題」と「学生の自らの生き方」をいかに関係づけていくかなどについて、具体的な取組事例を交え、紹介していただきました。

地元の企業や行政と連携した健康づくり、まちづくり・人づくり、高・大・自治体連携の取組など、今後、本学が大学COC事業を展開していくためのヒントがたくさん詰まった講演会となりました。



住吉廣行氏(松本大学学長)

京都文教学園110周年記念事業 京都文教大学地域協働研究教育センター開設記念事業 ともいきフェスティバル

2014年12月21日(土)に実施しました。

音楽、講話、茶道、模擬店など、多彩に開催！

京都文教学園創立110周年記念事業の一環として、2014年12月21日(土)、初めての大学開放イベント「ともいきフェスティバル」が開かれました。本学の建学の理念である「共生(ともいき)」。この日のキャンパスは、あらゆる世代、立場を越えた約1,500名の方が集い、まさに、「ともいき」という言葉を具現化したような会になりました。

オープニングを飾ったのは、葉衛陽さん、叶さくらさん親子による中国琵琶演奏。その後中央ステージでは、澤田謙照学園長による講話、山本正宇治市長、京都府の山下晃正副知事、本学学長平岡聡、京都文教短期大学学長安本義正による「京都府南部地域まちづくりミーティング」、京都府と共催で行う「宇治茶文化講座」と続き、メモを取りながら話に耳を傾ける聴講者の姿も見受けられました。

一方、フロアでは、宇治市や本学のボランティアセンターによる

活動紹介や、ぶんきょうサテキャン利用団体の体験ブース、京都すばる高校による地元産野菜の販売に、障がい者授産施設の模擬店、本学地域連携学生プロジェクト「宇治☆茶レンジャー」によるおいしい宇治茶の淹れ方体験コーナーなど50余りのブースが展開。

また、地元「宇治」をテーマにした総合的な学習「宇治学」の実践として、抹茶のお手前を学んだ、北小倉小学校3年生による「子ども茶席」など、三室戸小学校、北横島小学校の児童たちによる「宇治学」の取組発表も行われ、子どもたちの元気な声が会場中に広がっていました。

初めての取組でしたが、大学が地域の拠点として果たすべき役割のひとつが、今回の「ともいきフェスティバル」のような地域住民と大学とが一体となる場の提供ではないかと改めて感じました。



中国琵琶の演奏で開幕！



京都文教学園
澤田学園長による講話



行政と大学のトップによる
「まちづくりミーティング」



橋本素子先生による
「宇治茶文化講座」



ぶんきょうサテキャン
利用団体による販売ブース



宇治商工会議所による
「チャレンジショップ」も多数出店！



学生たちがおいしい宇治茶の淹れ方をレクチャーしました



京都すばる高校の生徒たちは
地元農家の野菜を販売



地元の人気ゆるキャラも
やって来た！



三室戸小学校による「宇治学」取組発表

北小倉小学校による「子ども茶席」

心のこもったお手前をどうぞ

北横島小学校の新聞は情報満載！

総合的な学習「宇治学」の発表

京都文教学園の創立110周年を記念した「ともいきフェスティバル」で、宇治市の小中学校の「総合的な学習の時間」で取組んでいる「宇治学」の取組の発表が行われました。

観光

観光をテーマに取組んだ三室戸小学校5年生は、自分たちの住む三室戸校区の菟道・明星町・志津川地区での現地学習の成果を発表しました。観光客の増加に伴うゴミのポイ捨て、野生動物による被害、若者の人口流出など、地域の課題を掘り下げ、自分たちで考えた解決策を提案しました。地域学習を通して、子どもたちは、地域の住民が問題解決に向けて協力している姿に触れ、地域の絆の大切さを感じていました。同時に、自分たちも地域の一員として、地域のことをもっとよく知り、自分たちにもできることを実践してみようという意欲を持つことができました。こうした地域学習により、これまで知らなかった地域の姿や何気なく見過ごしてきた地域の良さに気づいたりするなど、地域社会をより深く知ることが出来ます。そのことにより、地域社会の一員としての自覚が生まれ、地域に対する愛着や誇りが生まれます。次代の地域を担う子どもたちにこうした思いや願いを感じさせることが「宇治学」の目的の一つとなっています。

子どもたちがつくる宇治学検定

「ともいきフェスティバル」では、児童たちによる「宇治学」の発表だけでなく「宇治学検定」も行いました。京都検定など、各地のご当地検定が数多くありますが、他のご当地検定との違いは、問題を「宇治学」を学んだ子どもたちが作るという点です。つまり、「宇治学」を学んだ学習の成果の一つとして、「宇治学」の問題を作ることです。検定を受けるのも「宇治学」を学んだ子どもたちが対象です。大人が作った地域おこしのための検定とは違います。

子どもたちは、宇治学検定の問題を考えることを通して、「宇治学」の学びを振り返り、整理することができます。たくさん問題を作れるということは、それだけ「宇治学」の学びが多かったということです。そして、宇治学検定を受け、どの程度自分が宇治のことを理解しているのかを知ることができます。このように、宇治学検定は、「宇治学」での学びの自己点検、自己評価の機会となります。

宇治市内の小中学校に問題を募集したところ、5校(小倉小学校、北小倉小学校、南部小学校、宇治小学校、広野中学校)から、合わせて90件(小学3年生から中学1年生まで)の応募がありまし

宇治茶

宇治茶を学んできた北小倉小学校3年生は、「子ども茶席」で約100名の来客に対して、宇治市産の抹茶を使いお手前を披露しました。学校とは違う場所で、自分たちの知らない大人を相手に抹茶を点て、振る舞うことに子どもたちは緊張した様子でした。しかし、このように、学校で学んだことを校外で実践することで、生きた学習となり、実践的な学びとなります。子どもたちは、実際に経験することで、お茶席のしきたりやマナーを学ぶだけでなく、人をもてなす心や気遣いなどを学ぶことができ、貴重な体験の場となりました。

新聞

北横島小学校の6年生は、修学旅行の様子を新聞にまとめました。新聞を作ることによって、体験したこと、学んで分かったこと、考えたことなどを、多くの人に発信することができます。また、限られた紙面にまとめることにより、学びなおしの機会となり、学習したことを振り返ることができます。このように、新聞づくりを「宇治学」では是非取り入れ、「宇治学」で学んだ学習の成果を地域の多くの人に発信してほしいと思います。

た。その中から、「宇治学」として知っておくことが必要なものを選んで、「ともいきフェスティバル」で実施しました。

初めてということもあり、まだイベント的に行ったということもあって、応募校、応募数、宇治学検定の参加者はまだ少ないのですが、「宇治学」の取組を各校でさらに深めていくことにより、宇治学検定もさらにバージョンアップしていくでしょう。



「宇治学検定」に挑戦だ！